

西宮市制100周年記念

全国の西宮

は じ め に

大正14年4月1日、西宮神社を氏神とする旧西宮町は市制を施行し新たに西宮市となりました。施行日早朝には西宮神社大前に国県市の行政関係者を始め氏子の代表が参集し、市制施行の奉告とともに今後の発展、加護を祈念する西宮市制施行奉告祭を賑々しく執り行い、ここに西宮市は第一歩を踏み出しました。

西宮神社では平成から令和への御代替わりにあたり記念の諸事業を継続的に進めて参りましたところ、令和6年11月の本拝殿の御屋根葺替竣功をもって所期の事業を完了致しました。これにより西宮市制施行100周年記念並びに本拝殿御屋根葺替事業竣功(令和の御代替わり記念事業完了)の奉祝祭を市制が施行された4月1日に斎行致します。

そしてこの慶事を迎え、奉祝記念として『全国の西宮』を刊行致しました。

本書では「西宮」という地名に注目し、全国の地名、神社名、石碑、道標等の「西宮」を収集し当地との関わりを調べ、また近世紀行文や地図から当時の西宮の様子を探っています。

旅路で故郷の地名と出会くと、何かしら心が落ち着くとともにその関係性に興味が惹かれます。彼の世阿弥も佐渡配流で「笠取峠」や「長谷観音」に出会って都や故郷を思い出し、失意の中にも一筋の光明を得たような喜びを少なからず持ったことでしょう。

平安後期以降、地名として「西宮」が歩んできた歴史の中で、人々の移動とそれに伴う文化、信仰等の伝播により全国各地にその名は広がり、現在でも数多く確認することができます。

例えば当社から各地への分霊、神札頒布を通して、また「西宮の旨酒」として古くから知れ渡った灘の生一本西宮の清酒の販路を通じて、更には西宮漁師が有していた先進漁法を携えての東国方面移住など多様な形態で西宮の先人は開拓者精神を如何なく発揮し、「西宮」の足跡を各地に刻み込みました。

市制施行100周年にあたり、先人たちの絶えざる奮闘や数々の功績に思いを馳せ、各地の西宮を調査することにより、西宮の歴史の新たな一面を知ることができれば幸いです。

職員が各地へ調査や撮影に出向した際には、多くの方々にご協力、助言をいただきました。心より感謝を申し上げます。

令和7年3月

西宮神社宮司 吉井 良昭

目次

はじめに	3
解題『全国の西宮』の歩き方	6

第1章 地名「西宮」

解説・凡例	11
表1 現存地名に見る「西宮」	12
表2 旧地名に見る「西宮」	14
コラム「西宮市の西の由来」 「本社明細帳」	19
個別紹介	20
地図1 現存地名の所在地	30
地図2 旧地名の所在地	31

第2章 「西宮」のつく施設等

解説・凡例	33
表「西宮」のつく施設等	34
個別紹介	38
地図 施設等の所在地	58
コラム「西宮を名乗った人々」	59

第3章 全国の西宮神社

解説・凡例	61
-------	----

表1 現存する西宮神社

北海道	関 東	中 部	近 畿	四 国
北海道	茨城県	静岡県	滋賀県	香川県
	栃木県	愛知県	奈良県	徳島県
	群馬県	岐阜県	京都府	愛媛県
	埼玉県	三重県	大阪府	高知県
	千葉県		和歌山県	
	東京都	北 陸	兵庫県	九 州
	神奈川県	富山県		福岡県
		石川県	中 国	佐賀県
	甲信越	福井県	岡山県	長崎県
	山梨県		広島県	大分県
	新潟県		鳥取県	熊本県
	長野県		島根県	宮崎県
			山口県	鹿児島県
補遺				
コラム「[異形]のご神体」				

表2 現存しない西宮神社

北海道	関 東	中 部	近 畿	四 国
北海道	茨城県	静岡県	滋賀県	香川県
	栃木県	愛知県	京都府	徳島県
	群馬県	岐阜県	大阪府	愛媛県
	埼玉県	三重県	和歌山県	高知県
	千葉県		兵庫県	
	東京都	北 陸		九 州
	神奈川県	富山県	中 国	福岡県
		石川県	岡山県	佐賀県
	甲信越	福井県	広島県	大分県
	山梨県		島根県	熊本県
	新潟県		山口県	宮崎県
	長野県			鹿児島県
補遺				
コラム「北海道以北の「西宮神社」」				

個別紹介

北海道	関 東	中 部	近 畿	四 国
北海道 …… 100	茨城県 …… 109	静岡県 …… 129	滋賀県 …… 158	香川県 …… 182
	栃木県 …… 111	愛知県 …… 141	奈良県 …… 160	徳島県 …… 182
東 北	群馬県 …… 114	岐阜県 …… 145	京都府 …… 162	愛媛県 …… 184
青森県 …… 102	埼玉県 …… 115	三重県 …… 149	大阪府 …… 167	高知県 …… 186
岩手県 …… 103	千葉県 …… 115		和歌山県 …… 168	
秋田県 …… 104	東京都 …… 117	北 陸	兵庫県 …… 170	九 州
山形県 …… 105	神奈川県 …… 118	富山県 …… 150		福岡県 …… 191
宮城県 …… 106		石川県 …… 152	中 国	佐賀県 …… 193
福島県 …… 107	甲信越	福井県 …… 156	岡山県 …… 177	長崎県 …… 195
	山梨県 …… 119		広島県 …… 177	大分県 …… 196
	新潟県 …… 120		鳥取県 …… 178	熊本県 …… 199
	長野県 …… 122		島根県 …… 179	宮崎県 …… 201
			山口県 …… 180	鹿児島県 …… 201

「[西宮神社]の分布と〈媒介者〉」 …… 202

地図 1 北海道 …… 204	地図 5 中部(静岡) …… 208	地図 9 近畿 …… 212
地図 2 東北 …… 205	地図 6 中部(愛知・三重) …… 209	地図10 中国 …… 213
地図 3 関東 …… 206	地図 7 中部(岐阜) …… 210	地図11 四国 …… 214
地図 4 甲信越 …… 207	地図 8 北陸 …… 211	地図12 九州 …… 215

第4章 旅日記から見る西宮

解説・凡例 …… 217
表 旅日記から見る西宮史料一覧 …… 218
個別紹介 …… 226
コラム「阪神間の名所地を歩く」 …… 237
地図 関西関連地図 …… 238

第6章 絵図に描かれた西宮

解説・凡例 …… 289
表 掲載絵図一覧 …… 290
個別紹介 …… 292
コラム「西宮と西ノ宮」
「西ノ宮ステーション」 …… 317

第5章 石造物に刻まれた「西宮」

解説・凡例 …… 241
表1 「西宮」と刻まれた阪神地域の道標 …… 242
表2 全国の「西宮」石造物、扁額等 …… 246
個別紹介1 「西宮」と刻まれた阪神地域の道標 …… 250
個別紹介2 全国の「西宮」石造物、扁額等 …… 270
コラム「佐賀県のえびすさま」 …… 285
地図1 「西宮」と刻まれた阪神地域の道標 …… 286
地図2 「西宮」と刻まれた全国の石造物、扁額等 …… 287

協力者一覧 …… 321
調査担当一覧 …… 322

解題

『全国の西宮』の歩き方

兵庫県西宮市の市制100周年を記念して刊行する本書の内容を簡潔に表現するならば、日本列島のいずれの場所に「西宮」があるのか、またはあったのか、を網羅した一冊となります。もっともえびすさまが「戎」「蛭子」「恵比須」「恵美酒」などと表記されるように、西宮も「西之宮」「西ノ宮」「西乃宮」といった表記が見られます。そうしたいろいろな表記も対象にした上で、現在と過去の「西宮」を幅広く収集する足がかりとして〈地名〉〈施設〉〈神社〉〈旅日記〉〈石造物〉〈絵図〉の6つの項目を立て、およそ3年間の調査期間を費やしてまとめた成果が本書です。

そこで各項目の概要を示しつつ、それぞれの調査が持つ意義と、本書の楽しみ方を紹介したいと思います。

第1章の【地名「西宮」】は、全国の「西宮」とつく〈地名〉を集め、都道府県ごとに掲載したものです。現在、ある地点を地理的に表現する際に

広く用いられているのは住所表記です。例えば西宮本社は「兵庫県西宮市社家町1番17号」と表記されますが、ここでいう〈地名〉とは「番・号」より前に当たる部分です。

ただし、日本の住所表記が住居表示制度と地番制度に大別されるのに加え、明治期の^ち廃藩置^{はいはん}県や市町村制の導入、“平成の大合併”に代表される市町村合併、地域社会の動向（大学移転や新駅開業など）に伴う住所表記の変更、さらに地域独自の通称（京都市中の^{とお}通り名表記）の併用など、日本の〈地名〉は絶えず変化に^{さら}晒されてきたといえます。

そうした状況を踏まえ、第1章では一般的な住所表記に見える「西宮」だけではなく、^{あざ}字名など都市部では普段使用されなくなった「西宮」や、歴史の中で消滅してしまった「西宮」を、自治体への聞き取りや文献資料などをもとに掘り起こし、西宮本社や当該地の西宮神社との繋がりなど〈地

名〉の由来をたどることで、〈地名〉としての全国的な広がりを確認する試みとして大きな意義があります。また、かかる由来と連動して「西宮」がどのように読まれているのか(ニシノミヤ、ニシミヤ、サイグウなど)にも注目です。

第2章の【「西宮」のつく施設等】は、「西宮」と名付けられた各地の施設を、「遺跡」「公園」「交通」「施設」「橋」「バス停」などに分類し収載しています(但し兵庫県西宮市域の施設については、煩^{はん}雑^{ざつ}さを避けるため対象から外しています)。

こうした施設の名称は、それらが所在している〈地名〉と密接に結びついていることは想像に難くありません。例えば三重県松阪市^{まつさかし}小舟江町^{こふなえまち}西ノ宮にある遺跡・西宮貝塚は住所表記と関連しているが、愛知県名古屋市^{なごやし}中川区^{なかつわし}露橋にある西宮公園は、現在の住所表記に「西宮」が含まれていません。これは公園のある地域が、元は旧中川区西宮町であったが、昭和56年(1981)に同町が露橋1丁目に編入されたためです。従って現在の〈地名〉と施設名の繋がりが絶えてしまったかのように見えます。

しかしながら、西宮公園は消えてしまった旧西宮町の〈地名〉をいまに伝える語り部の役割を担っています。子どもの頃に遊んでいた“単なる公園”が西宮公園と知った時、かつての西宮町がその人の中によみがえってきます。つまり施設名とは、現在その地域で生活を営んでいる人々と、長い歴史を積み重ねた〈地名〉の記憶とをつなぎ合わせる糸のごときものであり、非常に重要な機能を

持つといえます。第2章を設けた意義はまさにこの部分にあります。

第3章の【全国の西宮神社】は、全国に現存している、またはかつて存在していた「西宮神社」を、西宮本社独自の調査報告書(「本社明細帳」と通称)や各自治体史の記述、都道府県神社庁や現地関係者への聞き取りなどを基に収録しています。現存・非現存合わせて700社を超えるデータが集まり、その由来や変遷、祭神をできる限り記載するとともに、当該神社が記されている文献名も紹介し、後考の用に備えています。

さて、この章が第1章、第2章の内容と深く関係することは論を俟ちません。現存・非現存を問わず、当該地の西宮神社の存在が〈地名〉や施設名としての「西宮」の由来となっている事例が多く、“信仰”という要素を核として、3つの章が相互に関連づけられるのです。

そうした点に加えて、従来西宮えびす信仰は人形を用いてえびすの神徳を語り歩く“えびすかき”により、室町後期以降全国的に広まったと言われてきました。また、江戸時代に諸国の町村を^{へんれき}遍歴し、えびすの神像札(御神影札^{おみえふだ})の配札を行った^{えびすがんにん}“夷願人”の活動も、西宮えびす信仰の拡大に寄与したと語られてきました。しかし、必ずしも史料的に裏付けされた言説ではなく、地域によって実態把握に精粗があることは否めません。さらに、蛭子命や事代主命を^{まつ}祀る「えびす神社」と「西宮神社」を並列に位置づけ、「えびす信仰」として包括的に語られる場合も少なくなかったの

です。

だが、全国の自治体史を博搜した今回の調査の結果、沖縄県を除く全国に「西宮神社」が存在し、由緒や変遷が各地域の史料によって確認できたこと、そして、西宮本社との関係性を推定できる「西宮神社」に限定した全国的かつ歴史的な分布を、地図上に可視化できたことが本章の最も重要な意義でしょう。なお、夷願人が活動した拠点に関しては神社の由来・変遷欄に記載しています。

第4章～第6章は、前章までとは趣を変え、“外”から見る西宮や西宮本社を中心にまとめています。

第4章の【旅日記から見る西宮】は、江戸時代に多様な身分の人々が綴った旅日記を100点収集し、彼らがどのルートで西宮町を訪れ、西宮町や西宮本社をいかに記述しているのかをまとめています。

西宮本社の門前町である西宮は、西国街道・中国街道の陸上交通と、瀬戸内海の海上交通が結節する物流の一大拠点として、江戸時代に著しく発展した商業都市であり、多くの人々が行き交う宿場町でした。その西宮町を訪れた者たちの記述は多くが簡潔で、町内や境内の様子を詳しく描写した日記は限られます。だが、彼らが泊まった宿の名前や宿泊料など、当時の西宮の住人は気にも留めなかった事柄が、現代の都市史の観点からは貴重な情報なのです。

また、神社境内の灯籠の詳しい形状、茶店の賑わい、境内で出会った農民から聞いた十日戎

の光景、さい銭として納めた額など、旅行者ならではの記述が実に興味深いのです。西宮町内の諸相については、西宮本社の歴代神主が書き綴った社務日記(『西宮神社御社用日記』として刊行中)にも記載はありますが、旅行者すなわち“外”から見る西宮の様子を通覧できる点に本章の意義があります。身分や職業によって記述の性格に違いがある点にも注目したいところです。

なお、西宮往還の旅路の描写も紙幅が許す限り掲載しています。江戸時代の旅行者が道中で見聞した風景を追体験することも本章の楽しみ方といえます。

第5章の【石造物に刻まれた「西宮」】は、「西宮」と刻字がある全国の石造物を収集したもので、大阪市・神戸市とその周辺に位置する阪神地域にある道標や里程標は別にまとめています。

まず、道標・里程標に関しては、西宮町に通じる諸街道の随所に設けられ、東西南北のいずれかの面に「西宮」の文字が刻されています。また、設置に関わった発起人・世話人・施主や講名、周辺の寺社・旧跡への道程のほか、六字名号やお題目が大きく刻字されていたり、施主による自作の和歌が詠み込まれていたり、道標から読み取れる情報量は少なくありません。往時の旅行者は道標を見て、自身の旅程を確認し、道中の安全を祈りつつ、急がぬ旅ならば寄り道を考えたのではないのでしょうか。こうした道中をあれこれ想像することに、第4章と共通する本章の楽しみ方があります。

一方、全国の石造物に関しては、神号や社号として「西宮」と刻された石碑や扁額^{へんがく}が多くを占めます。特に佐賀県佐賀市域は歴史的にえびす信仰が盛んなことで知られ、石碑の数は群を抜いています。ただ、これらは社殿を持たないため、今回の調査では「神社」のカテゴリーに含めませんが、西宮えびす信仰という面で優劣があるわけではありません。その意味で第3章と相互に補完する関係にあり、第1章で見た〈地名〉の由来との関連も注目点です。

第6章【絵図に描かれた西宮】は、主に江戸時代に作成された絵図の中から、西宮町や西宮本社が描かれた部分を抽出し、「西宮の町絵図」「大絵図」「街道図」「航路図」「名所絵」に分類し掲載しています。

冒頭の「西宮の町絵図」は江戸～昭和期の西宮町が描かれています。当然ながら描写の違いはありますが、町の中央を東西に通る西国街道が、西宮の商業と西宮神社の興隆を支える屋台骨だったことが一目で分かります。

続く「大絵図」～「名所絵」に関しては、絵師が描いた西宮と西宮本社であり、“外”からの視点という面で旅行者の見た西宮を取り上げた第4章と共通した性格を持っています。ただ、旅日記は旅行者が西宮で見聞きしたことを思うままに書いている一方、絵師にとって西宮はあくまでも全体の中のごく一部の要素であって、読み取れる情報量は限定的にならざるを得ません。

しかしながら、第4章や第5章の内容と併せて

絵図を眺めると、本章の価値は一段と高まります。例えば、旅行者が目にした道標は、街道のどの地点に立てられていたのか。また、彼らが記述した西宮往還の名所旧跡や風景は、絵図のどのあたりにあるのか等々。誰もが自由に旅行できなかった時代の旅路を、このような作業によって楽しむことができるでしょう。

以上、各章の紹介を通してその意義を述べてきました。なお、すべての章には掲載データの情報を一覧できる表とともに、第1～5章には各データの地理情報を基に作成した地図を付しています。地図は「西宮」の全国的な分布を視覚的に把握できるので、分布の疎密や傾向からさまざまな特徴を読み解くことが可能でしょう。

さらに、今回の調査は「西宮」を6つの項目に分けましたが、〈地名〉と〈施設〉、〈地名〉と〈神社〉のように、各項目は互いに関係し合っています。そこで「関連頁」の枠を設け、横断的な検索ができるようにしました。1つの「西宮」を出発点に、地図や他の項目を行ったり来たりしながら、他の「西宮」の由来を探究していく営み、これこそ最大の楽しみ方であり、おすすめしたい『全国の西宮』の歩き方です。

そして、もしも本書に掲載されていない「西宮」があれば、実際にその場所や施設、神社、道標などを訪れ、ぜひとも西宮本社に成果をご一報下さい。本書の刊行がきっかけとなり、歴史に埋もれた「西宮」が再び掘り起こされ、日本地図にその所在を刻むことができれば幸いです。